

は じ め に

学校長 角 本 順 次

一昨年度に「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」を主題として始めた本校の研究実践も第3年次を終えようとしている。前回の研究発表は、そのさいの紀要(第5集)にも記したとおり、研究第4集の延長線上にあるものであったが、今回は、同じ研究主題のもとで、内容においていっそうの深まりを目指すものとなった。それは、主題の実現に向けて、従来のものからさらに一歩進め、一人ひとりの子どもにそれが具現されることを意図して、各教員が特定の対象児を選び、これらの者に視点をあてて観察し、必要な指導を加えるという、ケースワーク的な方法をとったことによる。

一方、現今の教育状況を見るに、「一人ひとりを大切にす教育」がさかんに唱えられ、あるいは「個人差に応じる指導」が俄かに打ち出されようとしているところでもあり、また障害児教育の分野では、「能力・特性に応じた教育」「発達と障害に応じた教育」が追求されている現況からして、この「ケースワーク的方法」も格別新しいものではないといえる。

しかも、今回のわれわれのものは、未だ十分な深まりを遂げたとはいえず、その目指すところがよく果たされたというには、なお大きな隔りがある。特に、個々の児童・生徒に関する生育歴、家庭環境、教育的・心理学的・医学的資料などの各種情報をひろく集め、分析し、指導方針を立てて実行し、それを再評価するといった作業がきめ細かく、しかもチームワークによって進められ、並行してケース記録が完備しているという理想的な姿には程遠いものである。それに、今回は、研究実践の対象にならなかった者も少からず、それらの者に必要な指導がなされなかったわけでは全くないにせよ、全員にこのような取り組みが及ぼされたものでない点でも、試行的段階のものである。

しかしながら、医学や臨床心理学の現場とは異なり、種々の制約がある学校教育の現場においては、ましてやこうした取り組みが緒についたばかりの段階では、この程度でも精一杯のところである。それでも、以下に示す実践に見られるとおり、われわれは子どもたちを単なる研究の対象としてではなく、愛情に満ちて、力を尽くして子どもたちにあたって来たつもりであり、子どもたちは着実に成長したように思う。

ここにわれわれの研究実践を諸賢の前にさらし、御批判を仰ぎたいと思う。そのうち、これまでの歩みを点検して、今後の進め方を検討する所存である。